# 患者市民の医療参加

## 「できるところから」の地域住民の力―病院ボランティア―

浜松赤十字病院　看護副部長　櫻井恵子

浜松赤十字病院は、3年前の平成19年11月に浜松市中区高林から浜北区小林へ新築移転しました。浜北区には総合病院がなかったことから、地域住民の期待を背負って建築され、救急医療・災害医療・生活習慣病に至るまで地域に信頼される病院にと日々努力してまいりました。この間病院の発展とともに、大きく拡大してきた医療の住民参加としてのボランティア活動を紹介いたします。

当院のボランティアは「地域の方がご自分のできることを」というスタンスで自発的に参加しており、門戸も開放的です。14名であった会員が、現在99名と増加しております。増員の最大の要因は、新しい病院であることはもちろんですが、地域性を最大限に生かした諸々の住民参加型の活動にあると考えております。

また、会員の構成は80%が浜北区の住民であり、80％が60～70代の方という地域に根をはって付きた方々がボランティアの中心であります。当院を選んだ理由も「身近な病院」という印象からです。ここが当院の強みです。

活動内容は多岐にわたり、それぞれの「できること」が基本にしております。

しかし現在に至るまでには、独立した組織として成長できていない、ボランティアが主体的に意見を言う等のシステムの立ち遅れがある、病院スタッフの受け入れ姿勢の問題等、医療への住民参加が十分見えていない状況でした。

医療への参加を形にあらわすには、お互いのコミュニケーションが基本です。病院との会議や病院の方針でもある「職場改善活動」への提案、各種イベントへの参加、活動時間の評価等積極的な病院参加型スタイルを取り入れてきました。

これらの対応により、病院そのものの変化が見えてきました。ボランティアと職員の垣根が取れ、光の多い病院がますます明るくなったと誰もが感じております。笑顔とあいさつ、ここから会員の達成感がはぐくまれ、会員同士の連携が生まれ、組織化の下地ができてきました。まさに住民の病院参加への一歩と言えるでしょう。

まだまだ未熟な当院のボランティア組織ではありますが、活発な会員同士の発言で今、変化しております。患者と病院の間をとりもち、患者の側からの思いを表出し、意見を反映できるボランティア組織へと成長を期待しております。このように、病院へ積極的に参加する住民があってこそ、閉ざされがちな病院組織が開かれた病院へと変化していくと確信いたします。今後ますます問題となるであろうリスクやクレーム、暴力に対しても私たちは地域中核病院として住民に支えられ、乗り越えて行けるオープン

な病院を目指します。そして、地域の医療施設と手をつなぎたいと考えております。ご協力をお願いいたします。